

布團は一枚も入れて呉れてゐない。

僕は狐のやうに狂ひ廻つた。

毒は毒を以つて制せなければならぬ。

港に這入る汽船の汽笛が、つんざくやうに耳に響く。

僕は物を食はない。

しめやかな讀經の聲が、何處からともなく聞えて来る。

黒い衣を着た出石寺の小僧達が坐つて、態々僕の病氣平癒の爲に山を下つて、般若心經秘鍵か

何かを一心にやつてゐる。

つまぐる珠數の音まで聞えて来るのだ。

頭を押さえ付けられるような憂鬱に閉ざされる。

メガネを掛けた男が白い齒を見せる。

それが男か女か僕には解らない。

夜と晝とのケジメも付かなくなつた。